

〔特別寄稿〕

## 老年看護における文化と家族看護

正木 治恵

### I. はじめに

現在、我々は日本文化を反映した看護学の構築に向け取り組んでいる。日本文化を反映した看護学をどのような視点から明らかにしていくのか、明確な方向性はまだ見えていないが、本稿においては、老年看護領域における文化を反映した看護に必要な視点を家族看護の観点から抽出していくことを試みる。

まず文献検索を行った。医学中央雑誌の1981年～2004年3月までのデータベースから、「高齢者(老人)」「家族」と「文化」のキーワードを掛け合わせて検索した結果、26件であった。また、NACSIS-IRによる同様のキーワードによる検索結果は、362件であった。検索された文献は看護学分野のものは少なく、社会学、文化人類学、心理学、保健・福祉領域等であった。それらの文献は、社会の変化の中で日本古来の家族形態が変容していることや、高齢社会における介護問題や社会システム上の課題について取り上げたものが多かった。日本文化との関連では、高齢者の扶養に関する家族の伝統的な関係や、家族介護者の介護経験にみられる価値意識や規範などの文化的要因などが述べられていた。

本稿では、それらの文献を概観し、さらに海外との共同研究結果も併せて、老年看護において文化的要因をどのように捉えていくかについて、筆者の考察を述べる。

### II. 日本の家族形態の変容と老親扶養

「家」制度の廃止や高度経済成長による、就業構造

千葉大学看護学部

の急速な変化を通じて、都市に大量の労働者家族を誕生させ、日本の家族形態も核家族へと移行した<sup>1)</sup>。犬塚は<sup>2)</sup>、現代日本の家族変動の基本的方向性が<sup>3)</sup>、主に形態面における核家族化、小家族化、規範面における家(直系家族)制度的規範から夫婦家族制的規範への変化として概括されることが多かったことに対して、高齢化社会の到来という全体社会の変動の文脈に沿って捉え直された家族変動の諸特質は、必ずしもそのような表現に単純化できない複雑性を備えていると述べた。すなわち、今日の高齢化社会における家族変動の底流には、「家」制度的家族から夫婦家族制度的家族への直線的变化というよりも、むしろ、高齢化によって夫婦家族制の下でも必然的に生じる老親扶養や介護の機能を、一定の核家族化という歴史的経験をふまえて生じた世代間核家族のネットワークや、近居・二世帯住宅の活用など多様な形によって現実的必要に基づいて再構成し担っていくとする日本的な一種の「修正直系家族」への志向が存在しているとしている。また、小田は<sup>3)</sup>、急速な人口高齢化の中で、現代の日本家族は、伝統性と革新性が並存しながら大きく揺らいでおり、老親は同居して扶養されるべきで、それが日本型の高齢者扶養の形態だという伝統主義と、そうしたことに拘らない革新主義とが時には葛藤しながら並存しているのが今日の日本家族であるとしている。

今井は<sup>4)</sup>、「日本の介護者の意識と態度には、たとえ介護が強制的に生じたものであっても、それを家族の義務として受け入れ、実行することが何よりも優先される傾向がある。介護者の多くは、身体的不調や介護環境の不適切などの正当の理由がないかぎり、限界まで在宅介護を継続するために努力し続ける。そこには、わが国の家族関係における権利—義務

関係が存在し、それらの関係を「家」のなかだけで貫徹しようとする意識・態度が、周囲からの支援やさまざまな社会援助サービスの有効利用を躊躇させているのではないであろうか」と述べている。また高崎は<sup>5)</sup>高齢者虐待の背景として、未だに高齢者介護の大部分は家族によって担われ、しかも急激な高齢社会化、情勢の社会進出、家族機能の変化により家族(特に女性)が介護をすべきであるという価値観などが家族介護の厳しさに拍車をかけていることをあげている。

以上より、現在の日本においては、これまでの古い家族的社会秩序は確実に変化しているが、日本特有の伝統的な老親扶養規範が変容しつつ継承されており、それが扶養・介護にまつわる社会サービスの利用や高齢者と家族の関係性に影響していると考えられる。

### III. 高齢者と家族の関係性

現代の家族においては「情緒機能」が家族機能の中で重要な位置を占めるようになった<sup>1)</sup>。古谷野は<sup>6)</sup>、老親と子どもの間の日常的な交流について、老親子関係の指標を用いて調査した。老親子関係の指標として7種類の交流、すなわち、老親が感じる一体感(2項目)「言わなくても気持ちを察してくれる」「一緒にいてほっとする」、同伴行動「一緒によくおしゃべりをする」、情緒的サポートの授受「心配事や悩みを聞いてくれた/聞いてあげた」、手段的サポートの授受「ちょっとした用事やお使いをしてくれた/してあげた」をあげ、続柄・性・地理的近接性で比較検討している。その結果、遠方に居住する別居の娘が、老親との間にとくに強い情緒的なつながりを有していること、また同居の娘も情緒的なつながりの面は別居の娘に近い水準にあり、さらに地理的近接性ゆえに老親との間で特に密接な手段的サポートの授受を行っていた。他方同居の嫁は、手段的サポートの授受については別居の娘に近い水準にあったが、情緒的なつながりの面では別居の娘に遠く及

ばなかった。このように、親子関係を一对の個人間のつながりとみなし、日常生活上の関係性を情緒的一体感等の指標で明らかにしようとした点は、高齢者と家族の日本的な関係性のあり様の特徴が表現されたものと捉えられる。

北山は<sup>7)</sup>、同居している娘の認識が高齢者の健康観に及ぼす影響を明らかにするために、高齢者の家庭内役割遂行による家庭への貢献度に関する娘の認識等を調査した。その結果、高齢者の身体面の健康度や日常生活習慣に影響を及ぼしているのは、家庭生活を円滑に維持していくために必要不可欠な家族員として娘から当てにされていることであり、一方、主観的幸福感に表される高齢者の精神・心理面に影響を及ぼしているのは、娘から日頃の気遣いをどれだけ受けているかということであると述べている。また、岡本は<sup>8)</sup>、地域高齢者における家族との会話は主観的幸福感を高める可能性を示した。

山崎は<sup>9)</sup>、診療場面における医師・高齢患者—家族間コミュニケーションと付き添い家族の役割に関する日米比較研究において、医療場面におけるコミュニケーションの普遍性と文化的差異、診察でのコミュニケーションにおける付添の役割、三者間コミュニケーションの特徴を示した。また、藤原は<sup>10)</sup>、高齢者が生活場所を決定するにあたっては家族との関係性の中でなされることが多いこと、また、施設で生活することを主体的に意思決定していてもその後の生活の満足感につながるとは限らず、逆に、主体的な意思決定がなされていなくても、現在の生活に満足感を持っている状況も観察されたとしている。

筆者らが行った痴呆性老人の家族が介護を引き受ける経緯の日米比較において<sup>11)</sup>、日本の介護者は、必ずしも同居の子ども夫婦と高齢者の間で介護に関する意思決定がなされているわけではなく、介護者や他の家族員等の意向が相互に影響しあう中で協議されていた。

以上より、高齢者と家族の関係性として、同居別居にかかわらず情緒的なつながりが重要な位置を占め、それが高齢者の日常的な満足感ならびに高齢者

自身の意思決定に大きく影響している。ここに日本的な家族意識や価値観が反映していると考えられる。

#### IV. 高齢者と家族の介護経験

介護経験が介護者に与える影響に関する研究は、介護負担やストレスなど否定的影響として捉える研究が多いが<sup>3,12)</sup>、介護経験をそのプロセスに着目し、肯定的な側面から捉えようとした研究もみられる。諏訪は<sup>13)</sup>、家族介護者の被介護者である痴呆性老人の捉え方の変化に着目し、介護経験の発展過程を示した。また古瀬は<sup>14)</sup>、介護の苦勞認識の変化に着目し、介護者自身の介護体験認識が要介護者との共生へと変化する過程には、介護者の主体的行動とそれに伴う互酬性の認識が影響していたとしている。山本は<sup>15)</sup>、日本と米国の比較研究において、日本の文化では女性、殊に嫁の役割として介護が因習化しており、それが介護を継続する上での強い動機になっており、この因習と家族内の調和を保つという強い規制の中で、日本人介護者は、注意深い状況判断をしては、結果として自分の限界を押し上げつつ介護を行う様子が、米国人介護者に比べ顕著に見られたと述べている。また、日本人介護者の介護経験の基本的文脈として、価値と困難との本質的なパラドックスをあげている<sup>16)</sup>。すなわち、儒教的な敬老の精神や女性の家庭内役割などの社会規範や被介護者への愛着から介護には高い価値が付与され、さらにこの価値は社会的な賞賛などを通して構造的に維持されており、そのため、介護は介護者の生きがいの源泉にもなりうる。一方で、対人関係や生活上の制限などさまざまな側面で介護には多様な困難が伴い、その困難は時として介護者をもうこれ以上介護できないという限界状況に至らせ、逆に介護者の生きがい感を阻害するほどにもなりうるとしている。

以上の研究結果は、家族介護者の介護に関する意思決定は単に介護者の意思や希望のみではなく日本の社会規範に影響されているため、介護プロセスに

おいて様々な葛藤や軋轢、自己犠牲的要因が生じていること、その結果、家族の破綻をもたらすこともある一方で、それらを乗り越えていく努力と経験が介護者の自己意識に影響を与え、介護者の人間的成長をもたらす可能性があることを示している。

#### V. 高齢者ケアにおける文化的要因の捉え方

家族機能には他の集団では果たし得ない家族のみが行うことが出来る機能—本質機能—と、他の集団や組織で代替え可能な機能—副次的機能—とがある<sup>17)</sup>。家族機能には、生殖・養育機能や生活を保証する機能と共に、心理的・身体的安定を保つ機能、文化を伝達する機能などがある。現代社会では家族機能の外部への委譲が拡大していることも指摘されているが、文化の伝達とはどういうことなのであろうか。

和辻は<sup>18)</sup>、日常的な表現と了解を通じて人間存在の構造、従って実践的・行為的な連関の仕方を見いだし得るとし、一例として、日常経験の一部、朝起きて飯を食うということあげている。以下に引用する。

朝起きるのは通例「家」の内においてである。「家」は単に材木や土の集積ではなくして「住居」であり、住居としてすでに人間存在を表現している。「家」という言葉が通例家族共同態を言い現しているように、家の構造は通例家族的な人間存在を表現する。居間、寝間、客間、台所、玄関等は、それぞれに家族的な共同存在の仕方を示している。(略)食器や食卓や料理の仕方や食事の作法などがすべて一定の存在の仕方を表現する。我々はその表現の了解においてのみ飯を食うことができる。さらにそこでは家族の間に言葉や身ぶりがかかわされ、食事そのものが共同的になされる。我々は味覚をただ己れのみ感覚とするのではなく、共に食物を味わうのである。これらはすべて間柄の表現でありその了解であって、それなしには人は何物をも味わい得ぬであろう。

このような視点で高齢者の生活をみていってはどうか。“間柄”をみていくことによって、そこに文化

がみえてくるのではないだろうか。それはその高齢者と家族の文化であり、歴史であり、価値が反映されたものとしての表現と解釈することができよう。

ここで以前筆者らが行った<sup>19)</sup>、米国との比較研究においてみられた日本の高齢者の文化を紹介する。高齢者が抱く「Hope (希望, 生きがい)」の意味を明らかにするために、対象者に「現在のあなたに希望を与えてくれる, 希望を感じる, あるいは希望に関係していると思われる事柄をカメラに写してください」と依頼した。後日写真をみながら面接し、被写体と希望との関連を問うた。その結果、日本人高齢者では特に伝統的な慣習が希望を表すものとして多く写し出されていた。例えば、被写体として、毎月命日におまわりをしている墓や、病気や痛いところを洗うと効き目があると言われる刺抜き地蔵の洗い観音、公園に生き続けている日本最古のはすなどがあげられた。毎月命日にお墓参りする習慣は30年以上続いている行為であり、その人にとって、重要な意味をもつ行為である。この一定期間カメラを対象者に預けておき、日常生活の中で気づいた「希望」の対象を写していくという研究方法は、その人の目線で生活を追い、日々の何気ない生活の中に、その人の自己を支える意味を写し出すことを可能にしたといえよう。このように、その人の目線で日常生活の現象を追ったときにはじめて、いわゆる一般的な質問や会話では捉えられない、その人が持つ固有の文化を共有できるのではないだろうか。

外山は<sup>20)</sup>、「入浴しても、横たわった状態で入る機械浴槽が施設にはよくあるが、あれは欧風の入浴習慣にもとづいて欧米で開発された機械をそのまま輸入して医療施設が使い、それが福祉施設にも導入されたものである。日本の本来の入浴のかたちではない。かつて座位で入浴してきた高齢者にとっては、「人体洗浄」されているという感が否めないだろう。」と述べている。衣類や生活空間しかりである。ケアするものがケアするという目的のもとに、いわゆる「文化」に無頓着になっていたのではないかと反省する。

何か意味のあることをしている（本人はそんなことは思っていないが）手ごたえ、日々の暮らしの働き、これらを失ってしまった結果、高齢者の内的生命力は徐々に萎んでいってしまう<sup>20)</sup>。高齢者にとっては、日々の暮らしの中に「文化」があり、それが自己を支えるものとして存在している。さらに家族は日々の暮らしの中に継承されてきた、そして継承されていく「文化」を持つ。

以上から、老年看護において、高齢者を支えているその人に内在化した「文化」を十分に理解する必要があること、そしてそれがケアに活かされることが重要があるといえよう。

#### 引用文献

- 1) 後藤澄江：日本の家族と高齢化，宮本益治編，高齢化と家族の社会学，55—92，文化書房博文社，1993
- 2) 犬塚協太：高齢化社会における家族の変容と家族政策の対応動向に関する研究，日本証券奨学財団成果報告書要旨，1993
- 3) 小田利勝：高齢化社会における日本家族の伝統性と革新性：高齢者の家族扶養に焦点をあてて，現代日本文化と家族，日本大学総合科学研究所，89—116，1992
- 4) 今井幸充：日本における痴呆性老人家族介護者の意識と態度，老年精神医学雑誌，9 (2)：151—157，1998
- 5) 高崎絹子：高齢者のアドボカシーと高齢者虐待—虐待防止のための法制度化に向けて—，日本痴呆ケア学会誌，2 (2)：2003
- 6) 古谷野亘，岡村清子，安藤孝敏，他：老親子関係に影響する子ども側の要因—親子のタイを分析単位として—，老年社会科学，16 (2)：136—145，1995
- 7) 北山三津子，小西恵美子，太田勝正，他：娘の認識と行動が同居している前期高齢者の健康観に及ぼす影響，長野県看護大学紀要，3：1—10，2001
- 8) 岡本和士：地域高齢者における主観的幸福感と家族とのコミュニケーションとの関連，日本老年医学会雑誌，37 (2)：149—153，2000
- 9) 山崎喜比古，石川ひろの，ローター，デブラ：診療場面における医師・高齢患者—家族間コミュニケーションと付き添い家族の役割：日米比較研究，ファイザーヘルスリサーチ振興財団成果報告書要旨，2003
- 10) 藤原智恵子，松浦由紀子，森田愛子，他：生活の場に関する高齢者の意思決定（第2報）—生活場所を決定するまでのプロセス—，神戸市看護大学短期大学部紀要，22：63—76，2003
- 11) 佐藤弘美，正木治恵，湯浅美千代，他：痴呆性老人の家族が介護をひきうける経緯の日米比較，日本老年看護学会第1回学術集会抄録集：31，1996

- 12) 山田裕子：在宅痴呆老人とその介護者のサポートネットワークの構造についての研究—同世代介護者と次世代介護者の比較，トヨタ財団成果報告書要旨，1991
  - 13) 諏訪さゆり，湯浅美千代，正木治恵，他：痴呆性老人の家族看護の発展過程，看護研究，29(3)：31—42，1996
  - 14) 古瀬みどり：要介護高齢者を介護する家族の苦勞認識プロセスに関する研究—他者の介護体験認識とのズレの分析から—，家族看護学研究，8(2)：154—162，2003
  - 15) 山本則子：痴呆老人家庭介護者の人生における介護経験の意味：生きがいと介護経験の係わりについての日本人・日系米国人・米国人（白人）間の比較研究，トヨタ財団成果報告書要旨，1994
  - 16) 山本則子：痴呆老人の家族介護に関する研究—娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味，看護研究，28(4)：67—87，1995
  - 17) 石井京子：高齢者への家族介護に関する心理学的研究，風間書房，2003
  - 18) 和辻哲郎：人間の学としての倫理学，岩波全書，229—231，1934
  - 19) Gaskins S., Noguchi M., Masaki H., et al : Comparison of the meaning of hope in American and Japanese older adults. JANS Second International Nursing Research Conference, 1995
  - 20) 外山 義：自宅でない在宅，医学書院，2003
-